

よい語り わるい語り 16 小学校の子どもたちにどういふふうにすわってもらうか

学校なら校長室、図書館なら応接室で開始まで待たせてもらって
いよいよ時間になり、下見を終えた会場に改めて向かう。

すでに聞き手は入場している。

どういふふうにすわってもらうかは、担当の先生やスタッフに
下見の時にこちらの希望を話しておく。

聞き手にどういふ並びですわってもらうかは
会の成功失敗に直結するととても大事な話だ。

ただし、小学校と図書館では並び方が全然違う。

小学校は基本的に生徒に限定され、同じ年齢の子ばかりで聞く。

時間はきっちり決まっていて、生徒の途中での入退場は基本的にない。

一方、図書館や公民館では年齢も居住地域もばらばらの不特定多数が来場する。
遅れてくる人もいれば途中で出ていく人もいる。

赤ん坊が泣きだしたり、ケイタイが鳴ることもある。

環境が全然違うから、それに即した一番合理的なすわり方を考える必要がある。

今回は学校の場合。

小学校でのものがたりライブは生徒数と会場の大きさの関係で
いくつかのパターンがある。

全学年がいっしょに聞く場合。

低学年、高学年にわけて 45 分を 2 回する場合。

低学年、中学年、高学年にわけて 45 分を 3 回する場合。

1 学年ごとの場合。

小学校はほんとうに千差万別で

全校で 50 人もいなくて複式学級もありますという学校もあれば
生徒が 1000 人を越え、1 学年が 5 組までであるという学校もある。

マイクを使えば 1000 人一度もできないことはないし、実際、広い体育館で
やらせてもらったこともあるが、やはり後ろは豆粒だ。

話の筋は届けられるものの、それを人から直接聞く楽しさと言うのは
どれだけ伝わるだろう？

もちろん、それでもやらないよりはいいから、

「それしか方法がありません」と言われれば、それでやらせてもらう。

で、ふつうには 2 学年いっしょ、3 学年いっしょで
一度に 100 人から 200 人がいっしょに聞くケースが一番多い。

で、よく聞かれるのは、たとえば 1 年生から 3 年生までいるとして、それが
ぼくに対してたてに並ぶか横に並ぶかということ。

横だと 1 年生が前列に横に並び、ついで 2 年生で、3 年生が一番後ろに行く。
たてだとぼくから見て左が 1 年生、まんなかが 2 年生、右が 3 年生と言うこともあれば
1 年生をはさむように左右に 2 年生と 3 年生が来ることもある。

これは経験的に言って、たてがいい。

前方に一年生が横に並ぶのはよくない。

一年生はおしなべて背が低いから前の方が見やすいだろうという考え方がある。実際には子どもたちは床にペタンとすわり、ぼくはその前に立ってしゃべるから前でも後ろでも見えないということはない。

なぜ、1年生ばかりが前に来るのがよくないかというと簡単。

じょうずに聞くお手本がまわりにいないからだ。

語り手が場数を踏んで語りじょうずになっていくのと同様に

聞き手も聞く場数を踏んで聞き上手になっていける。

さまざまなものがたりを楽しめるようになっていける。

そのトレーニングは、まだ未熟な者が上手な聞き手の中に入れてもらうことでなされるのだ。

1年生は上級生より人生経験が短い。

だから、こういう場では先輩たちの様子を見ることで

「あ、こういうのがおかしいってことなんだ」

「こわいとみんな静かになるんだ」とかと気づき、

どういうふうに振るまうものかを学ぶ。

それはぼくたちがクラシックのコンサートやバレエや歌舞伎や能や、ふだんあまり見つけられないものを見に行ったときにも同じで、ぼくたちはまわりの空気から、ここはこういう場らしいと察しをつけるということが無意識にやっている。

おしなべて低学年は話を聞くのが下手だ。

たとえばちょっとおもしろい話を聞くと

「〇〇だって！」とか喜んで、となりの子とそれについての話を始め、

その間にこちらのストーリーが進んでしまっただけがわからなくなってしまうということがよくある。

それはまだ、人生経験不足でどんなときも自分が主役だと思い込んでいるからだ。だが「ワキにまわって、人の想像や行動を見聞きして楽しむ」ことができるようになると、芸術やスポーツを自在に楽しめるようになっていく。

おそらくその方が一生、得だ。

そして、マナーとして命令されたから静かにするのではなく、

静かにした方が楽しいから静かになっていく。

小学校でのイベントは常に、たくさん場数のひとつだ。

逆に小さい子ばかりが前にいて誰かが騒ぎ出すと、今度はその子がお手本になってしまう。

静かに聞いていた子まで「あ、ここはしゃべっていい場なんだ」と思ってしまうのだ。

だから、どうしても横にというなら、三年が一番前で、次が二年で、後ろが一年という手もあるが、これはさすがにすわりが悪そうでやったことがない。

だから、全体をたてにしてまんなかが一年で、二年と三年が両側から形にしてみよう。

すると、1年生が無理なくぼくの視界にすっぽり収まる。

なにかあれば、ぼくが直接注意できる。

といって実際に注意したことはまず、ないけれど、それでもよほどの時には注意できるスタンスを作っておく。

それはちゃんと聞きたい上級生たちへの、ぼくの研究でもあるのだ。

その様子を見ながら、左右に首をふって上級生を相手にするというのが一番具合がいい。